

四五

清瀬という局がコワイ目にあう

きよせ
清瀬

の局という人がいました。御屋敷で奥方様に仕えて、二、三日たつたころの夜、部屋で休んでいました。夜中に行灯の火が消えかけてうす暗くなったころ、上の棚から何か黒く丸いものがおりてくるのが見えました。

（これは何と不思議なものだろう。）と思い、声も出さずにいましたが、それはまくら元までおりてくるとそのまま胸の上へ乗ったのです。それはとても重く、まるで人に押されているように苦しく、起き上がろうとしても起き上がれず、しばらくの間苦しんでいました。苦しさのあまりに声を上げることでもできず、ただ念仏を口の中で唱えることしかできませんでした。そのうちにその黒いものはどこかへ行ってしまう、いなくなったということなのです。

